

地域発 防災ラジオドラマ in つくば 2009
筑波小学校区（上大島・国松・沼田周辺） 地震災害編

前提条件の整理（読まない）

地震発生 冬の平日の朝9時

震源地 筑波山直下

マグニチュード 7規模

筑波小学校区の震度 6弱〜6強

天候 くもり

課題 災害時の地域の連携

状況設定（読まない）

筑波小学校区は、つくば市で唯一の山間地帯であり、居住地域に極端な高度差がある他、幹線道路の本数も少ない。また、その特殊な地理的条件から水道や下水等や道路などライフラインも他地域とは違った材料や手法が用いられている。この地域は、合併後開発著しい市街と違い、いわゆる少子高齢化がつくば市で最も進んでいる地域でもある。しかし、昔ながらのご近所づきあいが根強く残っている地域でもあり、持ち家率が高いこともあり、日ごろ培った顔の見える関係を最大限に生かし、地域住民が連携した課題解決が行われていく。

前説（共通ナレーション・毎回放送・ナレーター別録り）

独立行政法人・防災科学技術研究所では、災害時に地域に起きることを住民主体で考えるための方法として、地域の災害シナリオの作成を提案しています。災害シナリオは、行政が作成した各種災害の被害想定やハザードマップを下敷きにして、地域の「より細かい事情」を勘案して、災害時に実際に起きることを時間に沿って具体的に整理して記述したものを指しています。災害シナリオは、地域の関係者が具体的に自分たちの直面する事態を考える仕組みづくりのきっかけとなるものです。シナリオにすることで、事態の展開していくイメージが掴みやすくなり、必要な対応もわかりやすくなります。

地域発防災ラジオドラマインつくば、筑波小学校区上大島・国松・沼田周辺、地震災害編。
このドラマは地域住民の方々がワークショップで議論した内容に基づくフィクションです。

(プロローグ・ナレーター別録り)

ある冬の、朝九時ごろ。ここは、つくば市の北部、筑波山の麓に位置する300世帯程度の規模の地域です。兼業農家が多く、お年よりは農家を営み、若い世代は市街地へ通勤しているという家族構成が一般的です。このドラマは朝食を済ませ、若い世代が仕事や学校に出かけ、一息ついたところで、これから洗濯物や片づけをしようとする時間です。

登場人物 (読まない)

上大島文子 高齢主婦 (家族と同居だが、日中独居)

班長岩下

島田 高齢主婦

区長高野

木下 地元住民

シーン① 地震発生 9時00分頃

- ・ 家族が朝食を済ませ仕事に出かけたあと、昼間独居の高齢の主婦が、洗い物や洗濯などの家事をしているとM7の地震が発生。しばらく揺れが続いたあと、揺れが収まる。洗濯機、洗い場の水も止まり、テレビも消える。
- ・ 身の安全は確保したが、どうすればいいかわからない。とりあえず外へ出てみる。

文子「はあくやっと思った行った。ほんとにみんな勝手ばかり言うんだから。朝はパンがいいだの、コーヒーが薄いだの、煮返しの味噌汁はいやだの…みんな行くとほっとするね。さーて、洗い物済ませて、お日様の出ているうちに洗濯ものを干しちゃわないと。」

♪ イスを引く音、洗い場での水道の水を流して洗っている音、食器のぶつかる音

文子「そういえば、おトヨさん、体調悪いつて言ってたけど、どうかしらね。あの人、気だけは若いから…無理すつからよ…」

♪ 地震の効果音。窓ガラスの割れる音

文子「なっ！なに？？地震？？うわっ！！おっきい！テーブル！テーブル！下！下！」

♪ しばらくの地震の音

文子「何だこれ！地震？怖い！！助けて！！誰か！たかしく、こうちゃん。一体何が？じっとしていたほうがいいの？どうしたらいいんだろ、とりあえず出ないと。」

♪ ガラスの割れる音、木造家屋のきしみ

文子「きゃあ！食器棚が倒れた？こんな大きいのに？いやだ…」

♪ 何かが壊れたり踏みつけたりする音

文子「あぶないっ！！食器もガラスも全部粉々…何これ…あんまり寒いから靴下重ねて履いて、こうちゃんが買ってくれたボアのスリッパ履いててよかったあ〜。(つぶやくように) こうちゃん…ありがとね。」

ナレーション(ナレーター別録り)

しばらく続く余震の間、家で半べそをかきながら震えていた文子だったが、やがて玄関がつぶれていることに気づき、縁側から這い出すように外に出た。

シーン② 周辺の安全確認 9時30分頃

文子「あっ！（大声で）岩下さん！岩下さん」

班長岩下「おう！上大島さん！！よかった！よかった！無事だったか！！」

文子「何これ？地震？大きさはどれくらい？みんなはどうなってんの？まわりは??」

班長岩下「でっかい地震だよ。電気もつかねえし、テレビで見れねえし。震度とか、震源とか、どんだけやられてんのか。ほら！まえに桜川もあふれてっから、どうなってっかなあ。もう、どろどろかもしんねえな。」

文子「じゃあ、うちの集落は大変じゃないの。」

班長岩下「あぶなくつてしゃあねえよ。あれもう、道路じゃねえよ。ぼっこぼこ。とても、車なんかじゃいけねえよ。ブロック塀倒れてっところもあるし。あんましひどいから、ほかの班がどうなってっかとおもって、戻ってきて電話しようとしたらよ、通じねえのよ。」

文子「電話が通じないんだ。慌てて外に出てきたから、電話をすることなんて考えてなかったけど、たかしもこうちゃんもまゆみさんもどうなってんだろ。私も連絡しなくっちゃ。携帯もダメ？」

班長岩下「さっき俺もやってみたけど駄目だったわ。家にラジオがあっから、今とってくるわ。たしか前につくばのラジオ局で緊急時の放送流してくれるって言ってたからよ。」

文子「駄目。携帯全然通じない。前からメールやったらって言われてたけど。難かしいし、面倒くさいし、いいやって思ってたけど、ならっっておけばよかった。どうしよう……。あら、島田さんだ！島田さん無事だったの?」

島田「文子さん！家の中にも怖いし、この後もどうなるのかと。他の人という方が安心と思っで。それで区長の高野さんとの庭なら広いし、区長さんだからなんかの時に安心かと思っで出てきたんだけど……。」

班長岩下「とりあえず二人で先に高野さんのところ行ってくださいよ。俺も班長だから、とりあえず、うちの集落を見回って、それから行くから。」

ナレーション(ナレーター別録り)

その言葉に従い、上大島、島田の二人は区長高野の家に向かった。

シーン③ 独居高齢者の安否確認 10時00分頃

島田「でもここまで来る途中。すごかった。ほらあの雷神様もただの石のかけらになっちゃって看板なんてぐんにやり曲がって倒れてるし、でも大きい声じゃ言えないけど、トイレに入っている時じゃなくて本当によかったと思って・・・」

文子「本当よね。でも、高野さんのお庭みたいに広いと安心。それでも、庭の石塔は倒れ割れているし、ほら、上の部分なんて、あんな遠くのほうまで転がって飛んで行っているし・・・」

島田「あっ！！あっちから歩いて来るのは、来た来た！あれ、木下さんじゃない？高野さんも家から出てきた！」

♪ 近づいて来るように声が遠く(小)から近く(大)に

区長高野「無事で良かった！ケガとかは大丈夫？」

木下「ここに来ている人らはよ、無事だからこれだよ。けど、他の人はどうなってんのか知んねえど。」

区長高野「そうなんだよ。だから、これから無事な人に協力してもらって、手分けして見に行かなきゃならないかって考えてたところなんだよ。飯田さんなんかはよ。奥さん動けないからどうなってんだか・・・」

木下「それを言ったっけ、山田の爺さんは一人暮らしだし、この時間じゃ、いっつもこたつで転がって居眠りしてっからどうなってっか。大丈夫かなあ。」

文子「山田さんのところなら、島田さんは近くだし、こっちに来る時見れた??どうだった。」

島田「とてもじゃないけど、沢の方は危なくて。遠くから見てもどろどろだったし、崖は崩れているみたいだし・沢向こうのお墓も崩れてたし。悪いけど、とても人のことは考えられなかった。」

区長高野「そうだよな。どうなってるのか心配でも、見に行くほうだって危ないし、この後、また地震が来ないとも限らないし。一体どうしたらみんなが大丈夫か確認できるんだか?どうしたらいいんだかなあ。よりによって、こういうときに区長だなんて・・・」

(エピソード・ナレーター別録り)

地震が発生してから1時間近くたちましたが、まだ家族との連絡もとれず、自分たちのおかれた状況を正確に把握することができていません。集まった人々の中で情報を提供しあい、とりまとめ、全体像をつむぎだす作業が行われています。また、日ごろ培った顔の見える関係性を生かし、要援護者を把握している者が、その確認について提案を行っています。この地域は一体このあとどのような課題を解決していくのでしょうか？また、皆さんだったらこの後どのような行動をとりますでしょうか？これを機会に是非考えてみてはいかがでしょうか。

(エンディング・ナレーター別録り)

このドラマは、住民をはじめ行政など地域のさまざまな関係者が協力して、災害時に想定される事態や対応について話し合い創作されたフィクションです。ドラマのシナリオづくりの過程では、地域社会の実態を調べ、かつ、行政の防災計画や防災体制、被害想定、ハザードマップ、マニュアルなどの公式な情報を参考にしています。社会的なシミュレーションとして、また、今後の改善の視点を盛り込むなどの理由から、意図的に事実と異なる設定をしている場合があります。

本ドラマに関するご意見、ご感想などを、独立行政法人防災科学技術研究所、またはラヂオつくばまでお寄せください。

このドラマは住民はじめ行政など地域のさまざまな関係者が協力して災害時に想定される事態や対応について話し合い創作されたフィクションです。ドラマのシナリオづくりの過程では、地域社会の実態を調べ、かつ、行政の防災計画や防災体制、被害想定、ハザードマップ、マニュアルなどの公式な情報を参考にしていますが、社会的なシミュレーション（模擬演習）として、また、今後の改善の視点を盛り込むなどの理由から意図的に事実と異なる設定をしている場合があります。

● このドラマは地域住民を主体とするさまざまな関係者が協力して災害時に想定される事態や対応について話し合い創作されたフィクションです。ドラマのシナリオづくりの過程では、地域社会の実態を調べ、かつ、行政の防災計画や防災体制、被害想定、ハザードマップ、マニュアルなどの公式な情報を参考にしていますが、社会的なシミュレーション（模擬演習）として、また、今後の改善の視点を盛り込むなどの理由から意図的に事実と異なる設定をしている場合があります。ドラマの背景となっている筑波小学校区に関して若干の補足説明を以下にまとめます。

● 筑波小学校区の特徴として、公設避難所がカバーするエリアが非常に広く、災害時に高齢者や要援護者が自力で移動するには避難所までの距離が遠いという問題があります。ドラマに登場する「働く婦人の家」は沼田地区に存在し、市が管理している施設ですが、一般的な避難所には指定されていません。ここでは遠い小学校に行くよりも、地域になじみのある施設を選択するかどうかという問題があるのかということを考えるために登場させています。施設は講習室、軽運動室、調理実習室、相談室などがあり、小学校よりも新しく建てられた建物です。

● ドラマの登場人物に区長さんと常会長さんが登場します。区長さんはこのドラマの舞台となった筑波小学校区に所属する4つの地区のそれぞれを代表する住民組織の代表ですが、常会長さんは区長さんの下で住民への連絡や通達を務める班長さんを束ねる役として存在したり、地区によっては置かないところもあるようです。いわゆる住民主体の地域組織には町内会、自治会、区会などのさまざまな名称がありますが、このドラマでは筑波小学校区に現在存在している地域集団の役割をそのまま生かした形でストーリーを作りました。またいばらきレスキューサポートバイク（IRB：田辺和夫代表）は実在の団体で、国内で発生したさまざまな災害現場でボランティア活動を実施しています。なお、レスキューサポートバイクは全国的なネットワークで活動が広がっています。